ＩＳ《インフィニット・ストラトス》 ～アヴァランチ・グリューネ～

ハワード姉さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ＩＳ（インフィニット・ストラトス）～アヴァランチ・グリューネ～

【Ｎコード】

Ｎ３７８３Ｑ

【作者名】

ハワード姉さん

【あらすじ】

８年ぶりに日本へと来日した少年。ヨハン・Ｆ・天月はＩＳを動かせる男性の一人だった。訳あってＩＳ学園に急遽転入する事になり、彼の前途多難な高校生活が幕を開いた

プロローグ

『間もなく、羽田空港に到着致します。ご乗客の皆様はお忘れ物の無きよう・・・・・・Ａｔｔｅｎｔｉｏｎ　Ｐｌｅａｓｅ――――』

「ん・・・・・・ふあ～～」

搭乗していた旅客機のアナウンスにより、俺の浅はかな眠りは覚醒した

アイマスクを取り払い、閉まりきっていた窓を開ける

「（８年ぶりの帰国・・・・・・。あいつ等は元気にしているだろうか？）」

古き友人の顔を思い浮かべ、やや口元が釣りあがる

次々と荷物を纏める他客に続くように俺も、自分の荷物を纏める

「っ～～～！　久々の日本だな～」
羽田空港に入り、再び身体を伸ばす

改めて自己紹介しよう。俺の名前は「ヨハン・F（フォート）・天月（あまつき）」
名前の通りハーフだ。ドイツ人の父と日本人の母を持つ
父譲りの長身と、母譲りの黒髪はストレートに伸ばした髪形
・・・・・・悲しいことに、よく女性に間違われる中性的な顔
好きな食い物は和菓子とハンバーガー

今回、俺が日本へ来日した理由は『とある学園への転入』という事らしい

「（まさか俺が『あの学園』に入学する時が来るとはな～～。・・・・・・あまり乗り気はしないけど）」

はぁ～と溜め息を吐く

無理も無い。なんたって俺は『世界でＩＳを起動できる男性の一人』なのだから

ＩＳ。正式名所（インフィニット・ストラトス）

元々は宇宙運用を目的として篠ノ之（しののの）束（たばね）博士が作り出したマルチフォーム・スーツ

その性能は従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能をみせつけたことから宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がＩＳに移っていった

そしてＩＳの唯一の欠点。それは『女性』にしか操れないということだ。理由は詳しくは解明されておらず、この機能により女尊男卑が当たり前になってしまった

そんなある日。世界中にとんでもないニュースが流れた

なんと『男』でありながらＩＳを起動させた少年が日本に現れた。というものだ

俺は元々ＩＳの適正確認はあったが、両親の言いつけでその事実は極一部の人間しか知らされていない

まあその機密も今日でオシマイなんだが・・・・・・。さらば、俺の日常

内心、今までの人生に敬礼し別れを告げる

「あ、あの～」

「ん？」

突然背後から声を掛けられ、その方向へ視線を向けると一人の女性がオドオドした様子で俺を眺めていた

その女性は、やや低めな身長に似合わずたわわに実った果じtゲフンゲフン。服のサイズが合っていないのか、若干ダボついた服が更に幼さを感じさせる

「Ｇｕｔｅｎ　Ｔａｇ（こんにちは）」

俺がドイツ語で挨拶すると、その女性は慌てたように懐からメモ帳らしき物をパラパラとめくり始めた

「Ｉｃｈ　ｆｒｅｕｅ　ｍｉｃｈ，　Ｓｉｅ　ｋｅｎｎｅｎ　ｚｕ　ｌｅｒｎｅｎ　Ｍｅｉｎ　Ｎａｍｅ　ｉｓｔ　Ｊｏｈａｎｎ　Ｆｏｒｔ　Ａｍａｔｕｋｉ（初めまして、俺の名前はヨハン・Ｆ・天月です）」

ドイツ語で自己紹介すると、女性はグルグルと目を回し始めてしまった

どうやらドイツ語が分からないらしい

さすがに可哀想なので日本語で話し直す

「大丈夫ですか？」

「は、はい～。・・・・・・へ？」

すると女性は間の抜けたような声を出しキョトンとした

ズルっと掛けていた眼鏡がずり落ちる

「すいません。実は日本語話せるんですよ」
ははは、と後頭部を掻く

「な、なんだ。そうだったんですか？　よかった～」
安心したのか、胸を撫で降ろす女性
うむ。笑顔が輝いていてよろしい

「改めて、初めまして。ヨハン・Ｆ・天月です」

「あ、こちらこそ。ＩＳ学園で教師を務める山田　真耶です」
ペコリと頭を下げる山田先生

「よろしくお願いします」
そう言って握手しようと手を差し出すが、山田先生はジッと俺の手を見つめるだけだった

「？　どうかしましたか？」

「へ！？あ、いえ。男性と握手なんてした事無くて」
そう言いながら山田先生は俺の手を両手で握り返した

「（大きな手・・・・・・それに何だか温かい）・・・・・・／／／／」
気のせいか。若干顔が紅いが・・・・・・熱でもあるのだろうか？

「大丈夫ですか？　顔が紅いですけど・・・・・・」
少し心配になったんで顔を覗きこむ

「は、はわわ！　だ、大丈夫でしゅっ！　〜〜〜！」
顔をコレでもかと言わんばかりに紅くした山田先生は慌てて手を離し、舌を噛んだのか。口元を押さえながら涙目になっていた

おいおい、大丈夫か？　この先生・・・・・・

前途多難な予感にゲンナリする俺であった

「え！？　じゃあヨハン君は昔からＩＳを操縦できたんですか？」
ＩＳ学園行きの電車に乗り、俺は山田先生とちょっとした話をしながら到着まで時間を潰していた

「ええ。たしか最初に確認したのが小学校１年のときでしたね」

「そ、そんな昔からなんですか・・・・・・」

「まぁ、祖国のお偉いさんにバレまいと父さんが機密にしてたんで、この事をしる人間はほとんど居ません」

「はぁ～。苦労してたんですね～」
しみじみと言う山田先生。すると電車の扉が開き、怒涛の通勤ラッシュが始まった

「キャっ！」
すると山田先生がなだれ込む人混みに押されバランスを崩し・・・・・・

「！！？」
あわよくば俺の胸に抱きつく体勢になってしまった

なんとも言えない弾力が俺の精神を削り取る

いかん・・・・・・これは果てしない程いかん！

「あ、あわわっ。ごめんなさい！／／／／」

山田先生は謝罪しながらも、満員電車の中で身動きが取れないでいた

「い、いえ。大丈夫です」

俺は冷静を保つために上を見上げる

おそらく下を見たらアブナい事になるだろう

俺とて健全な１５歳の男だ。大変な事態は間逃れたい

「あ、あう～～～／／／／」

プシューと山田先生は頭から蒸気を噴き出し、俯いてしまう

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・

ぐあああ！　早く到着してくれ！　俺の理性ポイントが急降下で減少中なんだーー！
こういった緊張感の漂う場面だと時間が長く感じる

「（ヨハン君の胸・・・・・・こんなに広いんだ。・・・・・・顔は綺麗なのにしっかりした身体。それに親しみやすい雰囲気・・・・・・私も彼氏はヨハン君みたいな人が・・・・・・）」
そこまで考えた真耶は、無意識に考えていた事に気付き、ブンブンと頭を振る

「（な、なに考えてるの私！　ヨハン君は生徒で私は先生なのに！）／／／／」
煩悩を取り払うが、視線が無意識にヨハンへと移る

女優顔負けの美しく凛々しい表情。黒くしなやかな髪を後ろで編んだ髪型
男性への免疫がない真耶が、そんなヨハンを意識してしまうにも無理は無い

しかし相手は１５歳の男子。教師である真耶にとって教え子になるであろう存在を恋愛対象のカテゴリーに入れるのは少し・・・・・・いや、かなり問題がある

「（うわわ。どうしよう・・・・・・心臓の音が直に聞こえる。ヨハン君を聴こえてるのかな・・・・・・変に思われてたらどうしよう～）」

心の中で涙を流す真耶。やはり彼女が意識してしまうのも無理は無い

年上とはいえ、うら若き乙女。恋愛には無縁な女教師の真耶であった

『次は、ＩＳ学園前～。ＩＳ学園前でございます』

や、やっとか・・・・・・

ようやく待ち望んだ駅名がアナウンスで流れ、俺は安堵の息を吐く

この１２分の生き地獄・・・・・・我ながら良くぞ生き残ったと言いたい

「まさか・・・・・・。本当にここに来ちまうとは」

荷物を肩に担ぎながら、目の前に聳え立つ巨大な教育施設『ＩＳ学園』

今日からここで俺は生活するのか・・・・・・

「それではヨハン君。改めて、ようこそ。ＩＳ学園へ♪」

その時の山田先生の笑顔は、とても輝いていた事をここに記そう

主人公・ＩＳ設定

名前：ヨハン・Ｆ・天月

身長：１８０ｃｍ

体重：６５ｋｇ

本作の主人公。ドイツ人の父と日本人の母を持つハーフの少年
長身でありながら、スラっとした体格と母譲りの長い黒髪の三つ編みと女性に近い顔立ち、鋼色のような瞳が特徴
顔立ちから良く女性に間違われる事が多い
責任意識が強く。積極的にリーダーシップを取るタイプ。年上や目上の人に対しては敬語で話し、人当たりの良い性格をしている。何かを護るためなら身体を張って守り通すなど、信念に忠実な熱血的な部分も持つ
恋愛に関しては縁がなく。かなり他人の行為に鈍感な所がある。年上によくモテル
織斑姉弟とは幼馴染であり、五反田兄妹とも面識がある

幼少の頃からＩＳの適正が確認されていたが、父親が彼を重んじて機密にしてきたが『織斑　一夏』の一見で、一夏の姉『織斑　千冬』の頼みもありお守り役としてＩＳ学園に編入する事となった。ちなみに同じ出身国であり同じ部隊の『ラウラ・ボーデヴィッヒ』とも馴染みが深い

好きな物は和菓子とハンバーガー。楽器演奏や料理が趣味
好きな動物は猫科全般

使用ＩＳは『アヴァランチ・グリューネ』

アヴァランチ・グリューネ
ヨハン専用に束本人から送られたＩＳ
腕や脚の関節部分以外のほとんどを包む、深緑の全身鎧を思わせる機体
様々な戦場に適応するため、従来のＩＳとは異なりシャープなフォルムを持つ
背中、両手・両脚にはマルチパーパス・ユニットが装備され、あらゆる戦場に対応することが可能であり数多くの追加装備がインストールされている
本来、ＩＳの地上移動はホバー走行なのに対し、この機体は『走る』という変わった移動方法を取ることによりエネルギーを節約する事ができ、取り回しも利く
主な戦術は単機による広範囲及び対軍勢制圧を目的とされ、ほとんどの火器が大型かつ圧倒的な破壊力を持ち『一撃離脱』特化型。名前の由来はドイツ語で『グリューネ』を『緑』『アヴァランチ』は『雪崩』を意味する
第４世代機にも引けを取らない第３世代機の最高傑作
全体の装甲が展開し、内部のマニピュレーターから紅く発光するナノマシンを散布させ『実体を持つ』分身を生み出すワンオフ・アビリティー『ゲシュペンスト（亡霊）』を搭載している。無線式の思考接続により多少自立的な稼動が可能。ただし発動可能時間は最高５分な上に使用後は出力が大幅に減少するため諸刃の剣である

機体のモチーフは機動戦士ガンダムＳＥＥＤ　ＤＥＳＴＩＮＹ　ＡＳＴＲＡＹの『テスタメントガンダム』

武装

ブラオ・アイゼン：『青き鉄槌』を意味する。本機のメインウェポン身の丈ほどの大きさを持つ武装腕。普段は背中のバックパックから連結しており、スラスターとしての役割も兼ね備えている。掌には高濃度圧縮レーザー発生装置が搭載されている。左右に一機づつ搭載している

破損時は連結を解除しパージする事が可能。射出するレーザー光に由来してこの名前が付けられた

ブリッツ・シュナイデン：『切り裂く稲妻』の意味を持つ全長１．６ｍの片刃剣

サイドアーマーに装備されている。エネルギー刃には細かい刃が無数にありチェーンソウのように回転するビームサーベル

ツェーン・クラレ：『十の鉤爪』を意味する。ブラオ・アイゼンの爪部に搭載されているエネルギー刃。最長１ｍまで伸ばすことが可能

イーゲル・フォトン：『光子のハリネズミ』を意味する。ウージーに似たビームマシンガン

近距離による射撃戦では取り回しの良い短機銃

換装兵器

シュツルム・フリューゲ：『疾風の翼』を意味する大型推進装置搭載の追加スラスター

広げると全長６ｍもの長さに広がる。旋回能力の高上、移動時間の

短縮の他。緊急時の全面シールドとしても使用可能。鳥の飛行原理をモチーフにしているため形が極似している

メテオ・カノーネ：『流星砲』を意味する超長距離砲撃を毎分４６０発という速度で乱射する殲滅兵器型レールカノン
両手に一丁ずつ持ち、背中のマルチパーパス・ユニットには巨大なバッテリー及び弾丸、ミサイルが搭載されている。散弾、榴弾、爆撃弾と数多くの弾種に対応している
どこぞの婦警が使っていた物に似ている・・・・・・

第1『編入は男のロマン？　俺にとっては地獄の始まりだ』

山田先生に案内され、現在俺は職員室へと来ていた

「織斑先生～。ヨハ・・・・・・天月君をお連れしました～」
職員室の扉を開け、山田先生はその人物の名を呼んだ

「ご苦労。面倒を掛けたな」
凛とした声と共に、我らが大将。『織斑　千冬』その人が現れた

「お久しぶりです、教官」

「その呼び方は辞めろ。私はもう教官ではない」
千冬さんはそう言うと困り果てたように溜め息を吐いた

「まぁ、こっちでは織斑先生と呼びますよ」

「そうしてくれ」

「あの～。お二人はお知り合いなんですか？」
すると山田先生がひょっこりと挙手する

「ああ、そういえば言ってなかったな。ヨハ・・・・・・天月はこう見えてドイツ軍所属部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』隊の隊長補佐を勤めていてな。私の教え子のような奴であり、弟のお守り役だ」
シレっとした態度で答える千冬さん。・・・・・・それにしても、山田先生もそうだったが、どうして俺を名前で呼ばないのだろう・・・・・？　やはり学校故にそういった気遣いだろうか

「そ、そうなんですか！？」
心底驚いたのか、眼を見開く山田先生
「隊長補佐・・・・・・と言っても護衛しかしてないんだけですけど・・・・・・」
「よく言う。模擬戦では私と対等に戦ったじゃないか」
んん？　と悪魔の笑みを見せてくる・・・・・・恐っ
「・・・・・・・」
山田先生なんて、もう声も出せなくなってるし
そういや、シュヴァルツェ・ハーゼで思い出した
「ラウラが寂しがってましたよ？」
「・・・・・・ボーデヴィッヒか・・・・・・まったくアイツは」
「そう言わんでやってくださいよ、ラウラは教官っ子なんですから」
「その馬鹿を惚れさせたのは何処のどいつだ・・・・・・」
「え？　なにか言いましたか？」
良く聞こえなかったため、もう一度聞きなおすが千冬さんは「なんでもない」と言った
「さて、与太話は終いだ。もうすぐＳＨＲの時間だ、山田先生。天月をお願いする」
「は、はい！」

そして俺は再び山田先生に連れられ、クラスへと案内される事となった

「じゃあヨハン君。私が名前を呼んだら教室に入ってくださいね♪」
山田先生はそういうと教室へと入っていった。てか呼び方戻ってる・・・・・・？

とりあえず気にせず。俺はバレない様に教室を覗き込む

え？　なんでバレない様にって？　隠密行動が俺の主義だからさ（キリッ

電波はさて置き。・・・・・・ふむ・・・・・・ものの見事に女子だらけ

約1名を覗いて・・・・・・

（一夏の奴。そうとう緊張してんな～）
クラスの真ん中。その一番前に座る男子。もとい８年ぶりに見る親友を眺めながら思う

（ぶふっ。一夏の奴ガチガチじゃねーか）
カチコチに固まった一夏に思わず吹き込む

織斑　一夏。苗字の通り千冬さんの弟にして俺の幼馴染の親友である

（お、箒の奴も同じクラスか。・・・・・・うまく行って・・・・・・ないな）
一夏の救いを求める視線を呆気なくスルーした箒を見て俺は溜め息を吐く

篠ノ之　箒。あの篠ノ之　束博士の妹にして、一夏同様幼馴染である

（ったく、相変わらず素直じゃねえな～箒）

しかしアレだ。８年ぶりの再会なのにこうも簡単に分かるとは、あいつ等ホント変んねーなてかあいつ等。俺だって分かるのか？　・・・・・・不安だ

「それでは皆さん。突然ですが、急遽ＩＳ学園に編入が決まった生徒を紹介します。それでは入ってきてください～」
さて、俺の出番のようだ

うしっと気合を入れ、扉の取っ手に手を掛ける

ガラッ

俺が扉を開くと同時に全生徒の視線が集まる

ぐ・・・・・これはこれで辛いな・・・・・・

なんとか表情を崩さず、教卓の前に到着する

「え～、皆さん初めまして。ヨハン・F・天月です、こんなナリだけど正真正銘男なんで、そこンところよろしく。・・・・・・あと、久し振りだな、一夏。箒」

「えっ・・・・・・・」「なっ・・・・・・・」

「「「「「「えええええぇぇぇぇぇ！！？」」」」」」

その時、クラス全員の叫びが学校中に木霊した

「ヨハン！？　お前、本当にヨハンなのか！？」

一夏は飛び上がり、驚いたように声を荒げた

「おう、正真正銘お前の幼馴染のヨハンだ」

「お前、女だったのｋ（スコーン！）へぶぉ！」

禁句を言おうとした一夏の顔面に剛速球のチョークがめり込む

「い、一夏！？」

あまりの威力にぶっ倒れる一夏へ駆け寄る箒

「一夏～？　俺に対してその言葉は禁句だって言ったよな？　言っ

たか？　言ったな」
チョークを玩びながら微笑む

「す、すまん！　あまりの変わりようにビックリしたんだ！」

仰向けの姿勢から即行で土下座する一夏

「ったく。今日は久々の再開に免じて許すが、次はスクラップだからな？」
そう言いながら一夏へ手を差し伸べる。なにやら後ろで「禁断の愛！？」だの「織斑君×美男子・・・・・・いい！」だの訳の分からん事を言っている生徒はとりあえずスルー

「よう、箒も元気そうだな」
一夏を引っ張り上げ、箒へと話しかける

「あ、ああ。・・・・・・本当にヨハンなのか？」

「なんだ？　箒まで信じてくんねえのかよ・・・・・・。しかたない、すぅ～～っ！」
俺は空気をふんだんに吸い込み・・・・・・

「篠ノ之　箒は～！　一夏の事ｇ「うわあああああぁぁあああ！！！！」ほえへひんひょうひはあ（これで信用したか）？」
俺の言葉に、顔を真っ赤にした箒がブンブンと首を縦に振る

まったく・・・・・・

「相変わらず、敵に回すととんでもない男だな・・・・・・／／／／」

紅くした顔を仰ぎながら溜め息を吐く箒
褒めても何も出ないぞ？
「褒めてない！！」
おお！　心を読むとは・・・・・・ますます出来るようになったな、箒よ！
「顔に出ているのだ！」
な、なんてこった！　孔明の罠か！？
「ホント仲良いなお前ら」
「うん。とりあえず一夏は爆死しろ」
「何故！？」
うるさい。この朴念仁
スパン！　スパン！　スカッ
「チッ、避けたか」
なんという事だろう。それが教師たる者の言葉とは思えない
いつの間にか俺たちの後ろに立っていた千冬さんの出席簿攻撃（アタック）の直撃を受ける一夏と箒。そしてかわす俺
「ち、千冬姉！？」

スパン！

案の定。千冬さんの愛称を口にした一夏が再び出席簿の餌食になった

「織斑先生と呼べ。馬鹿者」

ふ、怒られる一夏。ザマァ

ブゥン！

あぶ！？

「お前も自分の席に付け、愚か者」

「イエッサー」

大人しく席に座る俺。ちなみに席は窓際最後列である

「諸君、私が織斑　千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聴き、よく理解しろ。出来ない者にはできるまで指導してやる。私の仕事は弱冠１５歳を１６歳までに鍛え抜くことだ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いいな」

「そして逆らえば肉体言語という名の制裁が「何か言ったか？　天（ギ）月（ロッ）」ナンデモ無イデース」

なんという殺傷性のある目線だろう。・・・・・・きっとギャラドスにも負けることは無いだろう・・・・・・主に腕力で

とりあえずこれ以上の被害を逃れるためにうつ伏せになる。なにや

ら教室が騒がしくなったが、俺は急に襲ってきた睡魔に意識を連行させた

「・・・・・・くん。ねぇ、天月くんってば～」

「へあ！？」

肩を揺さぶられ、反射的に飛び起きる

「あ、あれ？　さっきパラガスがデデーンに。・・・・・・？」

「パラガス？」

俺を揺すり起こした隣の女子は小さく小首を傾げた

キョロキョロと辺りを見渡す

「夢・・・・・・か」

そう呟き再び眠りに「わ～～、寝ようとしないでよ～」付けなかった隣の女子。頭にウサギ型のゴムで髪の一部を纏め、異常に長い袖の制服を着たのほほんとした表情の女子

「えっと・・・・・・誰？」

ブロリー？

「私の名前は『布仏　本音』っていうんだよ～」

なんともマイペースな喋り方だな。・・・・・・てか、名前省略したら『のほほん』じゃん。ネタなの？　ガチなの？

「へ～」

「む～。女の子が自己紹介してるのに、そんな態度取るなんて酷い～」

ぶうぶうと膨れっ面をする布仏さん

「おお、悪ぃ悪ぃ。で？　何か用か？」

「うん♪　せっかくお隣さんになったんだから。お話ししたいな～って」

えへへへ、とハニかんだ笑みを浮かべる布仏さん

「話し？　俺と話しても詰まらないだろう」

「ええ～。そんなこと無いと思うけど～」

というか彼方。現在の状況把握してますか？
現在は授業中・・・・・・つまり

スパン！　スパン！

つまりこうなるのだ

「あう～」「くあ～っ」

「お前たち。それほどまでに堂々と話すとは良い度胸しているな」
頭を抑えながら唸る俺達の後ろで禍々しい覇気を放つ千冬さん

寝起きだった俺はかわす事が出来なかったので直撃うを受けた

「っよく見破りましたね先生。合格ｄ（スパン！）っこれで殴らなければ合ｋ（パァン！！）・・・・・・ごめんなさい」

「よろしい」
シュ～と煙を発てる出席簿を片手に、満足げに去っていった

「痛った～。おのれ織斑ティーチャーめ～、俺の頭はメンコじゃないんだぞ！？」
痛む頭を抑えながら

となりで未だ突っ伏す布仏さんへ囁く

「（大丈夫か？）」

「（あう〜。頭蓋骨が砕けた〜）」

「（いやいや、死ぬぞソレ）」

今頃、先ほどまでの行いを後悔しつつ授業を真剣に受ける事にした

第2『力は翳すためじゃない　俺はそう思う』（前書き）

突然ですが、自分なりに会いそうな曲を合わせて行きたいと思います^^；

オープニングテーマ
『Ｕｎｉｔｅｄ　Ｆｏｒｃｅ』
作詞、作曲、歌：栗林みな実

熱い願いが繋がるとき
その優しさを信じられるよ
そう君に出逢えたから
誰よりも強くなれる…

初めての感覚
胸の奥に静かな情熱生まれる
限りない条件揃えるより動き出そう
プライドを捨てて

それは自分の意思でも
運命の悪戯でも重なる答え
もう迷わない…

居場所なんて何処にもない
探し求めた日々は彼方へ
この手で護りたくて
満ちあふれてく力
想いがひとつになる…

風と紛れていた君の声が
今も心で響いてる
真っ直ぐな視線に
哀しみの雫が光るよ　未来目指して…

壊れそうになった夜
星が降る空の下で
笑顔だけが僕を照らしてた

熱い願い繋がるとき
その優しさを信じられるよ
そう君に出逢えたから
希望が輝きだす
今日より強くなれる…

居場所なんて何処にもない
探し求めた日々は彼方へ
この手で護りたくて
満ちていく力…
熱い願い繋がるとき
その優しさを信じられるよ
そう君に出逢えたから
希望が輝きだす
今日より強くなれる

この曲はアニメ『機神大戦ギガンティック・フォーミュラ』のＯＰなんですが。まあアーティスト的にあってるかなと・・・・・・はたして知っている人は居るのだろうか？

作者的にはけっこう好きな曲です

第2『力は翳すためじゃない　俺はそう思う』

キーンコーンカーンコーン

ＩＳ学園。編入初日、最初の授業が終わりを告げた
最初の授業内容はＩＳ基礎理論についての説明。まぁここに来ている生徒にとって復習のような物だ

・・・・・・こいつ以外は

「ダメだ・・・・・・全然分からん」
両手を頭に乗せ、完全にお手上げ状態の一夏

俺の場合は軍でシュバルツェア・ハーゼ隊の護衛も兼ねて、その機

体の性能から武装。各機の行動パターンなど様々なフォーメーションを叩き込まれた

「ふぅ・・・・・・」

ノートを机の中にしまい息を吐く

・・・・・・本当なら一夏に話し掛けたいのはやまやまなんだが。・・・・・・いかんせん、この空気の中行動するのは得策ではないと俺の中の軍歴が告げている

チラリと視線だけで見渡す

周りから集まるクラスの視線。・・・・・・無論、その対象は一夏と俺

良くは分からんが、教室の空気に緊張感が流れている

布仏さんは友人達と何かを話している。「何話したの？」や「抜け駆けはダメだよ」と意味不明な事を話している。布仏さんは以依然として笑顔だ

どうしたものかと悩んでいると、一夏に箒が話しかけそのまま廊下へと連れて行かれた

・・・・・・あれ？　これって俺だけ籠の中？

一夏たちが出て行くのを見送っていた女子たちが一斉に俺へと駆け込んできた

「ねぇねぇ！　天月君！」

「織斑君と篠ノ之さんってどういう関係なの？」

「彼女居るの！？」

「なんで髪伸ばしてるの？」

「本当に男の子なの？」

質問の嵐が炸裂する。・・・・・・ておい。最後のヤツ誰だ

「一斉に質問しないでくれ。俺は聖徳太子じゃないんだぞ？　まず一夏と箒は俺の幼馴染だ」

まぁ、箒に関しては一夏にそれ以上の感情を抱いてるがな。・・・・・・まあ言わないけど

「そして彼女は居ない」

こんな女みたいな奴を好きになる奴は居ないだろう
シュバルツェア・ハーゼでも、やたらと年上の隊員にイジラれまくったのを良く覚えている
そしていつもラウラが不機嫌だったのは未だに謎だ

「髪は母親が一定以上の長さに切るのを禁止されたんだよ」
俺の母。『天月　奏』はやたらと髪を切るのを嫌がる
そのセイでどれだけ苛められた事か・・・・・・まぁフルボッコにしたけど

その後も、次々と質問に答え。俺の体力と精神力は荒削りにされたのだった・・・・・・

廊下ではチャイムが鳴ると同時に出席簿アタックの炸裂音が鳴り響き、頭にタンコブを作った一夏がトボトボと教室に戻ってきたのは別の話し

ちなみに箒は席に座っていた

「――――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠外を逸脱したＩＳ運用をした場合は、刑法に罰せられ――――」
すらすらと教科書の文を読んでいく山田先生。相変わらず、授業について行けないのか一夏は項垂れていた

そういやＩＳの参考書が各地の家に手配されたはずなんだが・・・・・・一夏の奴、どうしたんだ？

すると、困っていた一夏に気付いた山田先生が一夏どうしたのかと尋ねるが、一夏は狼狽している

「分からないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生なんですから」
そういって胸を張る山田先生。何という優しさだろう・・・・・・
軍に居たときの千冬さんとは天と地の差だ

「先生！」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」
一夏の言葉に教室が静まりかえる

「え・・・・・・ぜ、全部ですか・・・・・・・？」
流石の山田先生も困り果てたように顔を引きつらせる

「え、えっと・・・・・・・織斑くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

シ――――ン

山田先生の質問に教室は更に沈黙する
当たり前だ。解らなければ此処に来るのは不可能に近い

教室の反応に一夏は「あれ、おかしいな」と言いたげな顔で周りを見渡す

解ってないのはお前だけだ

はぁ、と溜め息を吐く俺。すると一夏は俺へと視線を向ける。その眼はあからさまに「同士」の眼を向けていたが、俺はそれを切り捨てるように窓の外へと視線を向ける

いい天気だ

すると今まで黙っていた千冬さんが呆れた様に口を開いた

「・・・・・・織斑、入学前の参考書は呼んだか？」

おお、丁度俺が知りたかった事だ

「古い電話帳と間違えて捨てました」

・・・・・・アホだ。アホがここにいる

パァン！

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者」

本日４回目の出席簿アタックが炸裂する。哀れ一夏、鬼教官の愛の鞭（出席簿）は痛かろう

「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ、天月は織斑の勉強を見てやれ」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと・・・・・・」「んな！？　なんで俺が！？」

「やれと言っている」ギロリ

「「・・・・・・はい。やります」」

睨まれた哀れな子羊は、静かに了承する事しか出来なかった・・・・・・。おのれ一夏。お前のせいで俺まで巻き込まれたじゃねぇか

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ。・・・・・・『お前』ならよく知っているだろう、天月」

「・・・・・・『規則（ルール）を守れぬ者に何かを護ることはできない。しかし時として規則（ルール）を放棄することで護れるモノもある』・・・・・・ですね」

俺の答えに、千冬さんは微かに笑うと「そのとおりだ」

はぁ・・・・・・やるしかないか。元々俺の仕事だしな

「一夏。分からないことがあったら俺に聞け、教えてやっから」

「お、おう・・・・・・・悪ぃ」

「気にすんな。昔からそうだったろ」

俺はそう言って再び空を見上げた

ホント・・・・・・いい天気だ

「だからな？　ＩＳのＰＩＣ。パッシブ・イナーシャル・キャンセラーは基本的なシステムなんだ。まずこのシステムを理解しないとまともに飛ぶことも出来ない。飛べたとしてもコントロールできなきゃ地面に真っ逆さまだ」

二時限目終了後。俺は授業内容を一夏に説明していた
一夏は時折「ふむふむ」と頷きながらノートにメモを記入している

「ちょっと、よろしくて？」
すると突然話しかけられ、その方向へ視線を向けると一人の女子が立っていた

地毛の金髪をしなやかなブロンドヘアーにし、白人特有の蒼眼はややつり上がり腰に手を当てたポーズは高貴な雰囲気をかもし出していた

「何か用か？　今ちょっと忙しいんだけど」

「まあ！　なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

あ～。なるほど、そういうタイプか

「悪いな、俺は君が誰なのかも知らないし興味も無い」
シレッとした態度で切り捨てる
正直この手の相手は苦手だ。力を持つが故に自分を偉いと思い込み他者を見下したような態度を平然とする間違った覚え方をした子供

の戯言だ

「きょ、興味がないですって！？　わたくしはセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生にして、入試主席のわたくしに、興味がないですって！？」

なるほど、イギリスの貴族出身か。ならこういう態度も頷ける

貴族という生き物はどうも間違った思考でいかん。たしかに貴族は高貴な存在・・・・・・しかしその権力の使い方は間違っている

「代表候補生・・・・・・ね～」

しかし俺は違う。俺は知っている・・・・・・戦場の恐ろしさと命の貴さを・・・・・・

「そうですわ。わたくしはエリートなのですわ、本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

いい加減、うんざりしてきたな・・・・・・

「・・・・・・裏の現実を知らない餓鬼が」

「なにか言いまして？」

「いや、別に。それより俺はこいつの面倒をしてるんで、話しがあるなら後にしてくれ」

そう言って一夏を親指で指差す

「そういえば、そちらの方はＩＳ初心者なんですってね。でしたらこのわたくしがいろいろと教えてさしあげてもよろしくてよ？」

「え？　あ・・・・・・・えっと」
狼狽する一夏はチラリと俺を見る。俺としてはありがたいのだが・・・・・・まぁ、千冬さんにも頼まれたし責任は俺が持つ

「悪いが、指導員なら間に合ってる」

「ですが、あなたも男性ではありませんか。いくら知っているとはいえ候補生でもないあなたよりは良いと思いますが？」

「無用だ。俺はドイツ軍で7年間ＩＳ部隊の補佐を勤めてきた。実力云々の前に知識は豊富だ」

「ど、ドイツ軍・・・・・・」
流石に顔を引きつらせるオルコット

「お、お前。軍に所属してたのかよ」
一夏の言葉に「まぁな」と答える

キーンコーンカーンコーン

「そら、授業開始の時間だ。席に戻ったらどうだ？」

「っ・・・・・・！　また後できますわ！　逃げないことね！　よくって！？」

「良くない」
俺の声にも耳を貸さずに、オルコットはツカツカと自分の席に行ってしまった

はぁ・・・・・・。厄介なのに絡まれちまったな・・・・・・

「ヨハン」

「ん？」

「お前、変わったな」

「・・・・・・そりゃ変わるさ、人間だもの」

「いや、なんかこう・・・・・・雰囲気が鋭くなったって言うか・・・・・」

「まあ、いろいろあったんだよ」

そう、いろいろあった・・・・・・

俺はそう思いながら自分の席へと向った

第3『祖国を馬鹿にされりゃ　俺だって怒るさ』

三時限目

1．2とは違い、どうやら今回は千冬さん自ら教鞭を打つようだ

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

ふむ、やはり千冬さんらしい姿だ

教科書を開き、いざ語ろうとした時。なにかを思い出したのか、教科書を教卓に置いた

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

クラス対抗戦。その名の通り各クラスから一名の代表者を選び、ランキング方式で競い合うという恒例の行事だ

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・・・・まぁ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいして差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

千冬さんの言葉にざわざわと色めき立つ教室

まぁ、クラス長に相応しいと言えば、信頼性。判断能力。そして操

縦者としての技量。この三つが揃った人物が好ましいと思うが・・・・・・

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

ふと、一人の女子が一夏に推薦する。・・・・・・一夏、は責任感やその場の状況で突っ走るところあるんだが・・・・・・俺としては賛成とだけ言っておこう

「天月くんを推薦しま～す」

・・・・・・は？

一瞬、頭の中が真っ白になり、声のした９０度右。・・・・・・というか隣へギギギと首を向けると、健やかな笑顔で挙手をする布仏

さん

「では候補者は織斑一夏。ヨハン・F・天月の二人・・・・・・他にはいないか？　自薦他薦は問わないぞ」

なんてこった・・・・・・拒否どころか候補に入れられてしまった

「待ってください！　納得がいきませんわ！」

両手を机に叩きつけ立ち上がるオルコット

「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！　わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのでしか！？」

ならお前が自薦すればいいんじゃね？

内心でツッコム。俺としてはありがたいのだが

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で――――」

その後も、淡々と講義を続けていくオルコット。聞くのも嫌なので無心になって聞き流す

「――――！　――――――――！　――――――！？　――――――――。――――――――！」

うむ。まったく聴こえない。さすが日本の精神統一、主に隠密行動の俺にとってかなりありがたいスキルだ

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――――」

・・・・・・ア？　コノ餓鬼ハ今、ナンテ言ッタ？

「Ｈａｌｔ　ｄｉｅ　Ｋｌａｐｐｅ　Ｍａｄｅｌ・・・・・・（黙れ小娘）」

俺が放った殺気交じりの声が教室に沈黙を呼ぶ

「Ｙｏｕ，ｄｏｎ'ｔ　ｇｅｔ　ｇａｙ　ｋｌａｓｓｅ　ｔｏｍｅ？（優秀だからといい気になるなよ？）」

机に膝を突いたまま吐き捨てる

「ｙｏｕ　ｗａｓ　ｊａｐａｎｉｃａｎ　ｗｉｅ　ｄｉｅ　Ａｄｌｉｇｅ？（お前のような貴族かぶれに日本の何が分かる？）」

ギロリと睨みつけると、オルコットは顔を引きつらせ後ずさりする

さすがの俺も第二の故郷を愚弄されて黙っていれるほど人間できていない

「な、何を言っているんですの！？　分かるように話なさい！」

「聴こえなかったかＭａｄｅｌ（小娘）。黙れ、自意識過剰野朗。

そういったんだよ」
ふんと嘲笑う

「っつ！？　決闘ですわ！」
ついに怒りの怒発点を突破したオルコットが再び机を叩きつける

「いいだろう、そのプライドをズタズタに切り刻んでやる」

「いいかげんにしろ二人とも。これ以上やるなら表でやれ」
殺気を纏った千冬さんがギロリと俺達を睨む

「天月。お前の言いたいことは分かるが時と場所を考えろ」

「・・・・・・Ｊａ，ｉｃｈ　ｖｅｒｓｔｅｈｅ（わかりました）」
俺は殺気を抑えて外へ視線を向ける

「オルコット。お前も馬鹿ではなければ他人が言われて怒りを買うような言動は慎め」

「・・・・・・はい」

キーンコーンカーンコーン

時間は一気に飛んで放課後。やや夕暮れに空が染まる

「うう・・・・・・」

荷物を整え。帰宅準備をした俺が一夏へと近づくと、案の定頭を抱えて蹲る一夏

「一夏〜。帰ろうぜ〜」

「お、おう。・・・・・・しかしどうしてこんなにややこしいんだ・・・・・・？」

教科書をカバンにしまいながらゲンナリする一夏

「帰ったら今日の復習だな」

「ぐう・・・・・・」

「ああ。天月くんに織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

呼ばれて視線を向けると、山田先生が書類を片手に立っていた

「えっとですね。お二人の部屋が決まりました」

そう言って部屋番号とカードキィを俺達に渡す山田先生

はて？

「俺達の部屋。決まってなかったんじゃなかったんですか？　前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど・・・・・・」

そういや俺もそんな話を聴いたような・・・・・・

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理矢理変更したらしいです。・・・・・・お二人とも、その辺りのことって政府から聞いてますか？」

政府。一夏はもちろん日本の、俺は祖国ドイツ。まぁあながち保護と監視の両方をつけたいようだ

いい迷惑だ

「荷物なら私が手配しておいた。ありがたく思え」

不意に後ろから千冬さんの声が聞こえる

デケデンデテテン・デンテン・テン！　（スネ――――ク！！）

その瞬間。俺の脳内にメタルでギアなデットＢＧＭが流れる

見つかっただけでゲームオーバーの無理ゲーである

しかも有効範囲は２００ｍ以内という鬼畜設定

「まあ、生活必需品だけだがな。着替えと、携帯電話の充電器があればいいだろう」

「了解っス」「ど、どうもありがとうございます」

大雑把な説明を受けた俺たちは先生方に別れを告げ、早速自室へと

向った。一夏が大浴場を使えないと落ち込んでいた
その気持ちは分からんでもない

「えーと、１０２５・・・・・１０２５。あった、此処みたいだな」
メモを頼りに寮へと入り自室前に到着する

ガチャ

扉を開き部屋へ入る

おお

「意外と様になってンな」
部屋には大きめのベットが二つ並べられ。他にもビジネスホテル以上の設備が用意されていた

「奥のベットいいか？」
終始笑顔の一夏

「おう、かまわない」
そう答えると一夏は布団へと飛び込んだ。それに釣られて俺も自分の布団に腰掛ける
おお、中々のふわふわ感

さて

俺は一息吐くと上着のボタンを外し始めた

「おわ！？　おまっ、いきなり脱ぐなよ！」
なぜか仰天し顔を反らす一夏

「はあ？　俺は男だぞ。それともお前、コレなのか？」
ゼスチャーでオネエを現す

「いや、男だってのは分かってんだけど・・・・・・」

なぜか顔を赤らめる。・・・・・・やっぱりコイツ、お「断じて違う！！」さいですか

「長旅で疲れた。先にシャワー借りるぜ」
着替えを片手にシャワールームへと向う

第４『女は恐ろしい　俺は思い知ったよ』

「だから、ここはさっきの授業でもあったが――――」
風呂から上がってすぐ、一夏に授業の復習及び基本設定を説明していた

コンコン

すると、部屋の扉が叩かれた。誰か来たようだ

「誰だ？　ちょっと出てくる」

「おう」
一時復習を止め、俺は扉へと向った

ガチャ

「あ・・・・・・」
扉を開くと、そこに居たのはオドオドとした表情でモジモジしている箒だった

「おお、箒か。一夏に用か？」

「な、なぜ一夏限定なのだ！／／／／」
「顔を紅くして言っても説得力ないぞ」
「ぐ・・・・・／／／／」
相変わらず素直ではない箒に溜め息を吐く
「まぁいいや。一夏も部屋にいっから上がっていけよ」
俺はそういって箒を招き入れる
「じゃ、あとよろしく～」
そして俺は部屋を出た

バタン

「お、おいヨハン！？」
突然の事に戸惑い、ドアを開けようとするが、俺が反対側から抑える
「あれ？　箒？」
すると案の定。箒の声を聴きつけた一夏の声がドア越しに聞こえる
「い、一夏！？」
一夏の登場に、更に戸惑う箒。ドア越しでもその表情が想像できる
「一夏～。俺ちょっと用事思い出したから少し留守にする～。後のことは箒に任せといたから」
「お、おい！」
んじゃな～と足早に部屋を後にする

「さ～て、これからどうすっかな～」
時刻は午後２０時１５分。最終終身時間は２２時。ある意味、１時間以上は部屋に戻れない・・・・・戻る気はない。なぜかって？
邪魔するだけ野暮ってモンだ、そしてなによりめんどくさい
適当に寮をふらつく
「あ！　天月くんだ！」

「え！？　どこどこ！？」

「お～い。天月く～ん」
フラフラと歩いていると、数人の女子が俺の姿を捉え声を掛けてきた――――んだけど・・・・・・

「なっ！？」
そこにいた全員が寝巻き。しかも胸元のボタンを全開にしたのがいればズボンすら身に着けていない女子までもがいた

「ちょっ、なんつう格好してんだ君らは！」
すかさず視線を外す。が――――

「あ！　天月くん！」

「ホントだ～」

「わぁ、髪の毛下ろした姿も綺麗～」

騒ぎを聞きつけた他の生徒達がぞろぞろと現れる
みな、なんとも淫らな姿
俺の理性が一気に崩れる

いかん、このままでは囲まれる！

身の危険を悟り、未だ人のいない道に向って走り出す

「あ！　逃げた！」

「待ってよ天月く～ん」

「捕まえろ！」

「逃がすな、追え！」

「者共、出遭え。出遭え～！」

そして何故か追ってくる女子一同

恐っ！

「「「「「「「待って～」」」」」」」

「イヤだぁあああ！！」

俺は恐怖の悲鳴を叫びながら一心不乱に廊下を駆け抜ける。時に階段の手すりを滑り台のように滑り。時に物陰に隠れて難を逃れる

というか、軍で身に着けた身体能力に何で追い付けれるんだあんた等は！？

人生初。夢にまで見たリアル鬼ごっこ。捕まったら殺される（精神的な意味で）！

「こんなところで・・・・・散ってたまるかぁあああああ！！」

「「「「「「「待て～～～～！」」」」」」」

「ギャァァァァァ！！！」

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ」

「さあ、観念しなさい」

「チェックメイト・・・・・・だよ」
「大人しくその身を委ねなさい」
「ハリーハリーハリー」
「大丈夫・・・・・・痛いのは最初だけだから」
「優しくしてあ・げ・る♪」
「うふふふふふふ」
万事休す。虚しくも取り囲まれ逃げ道を防がれてしまった今日この頃
というか恐すぎな上に最後らへんアブなすぎだろ！
「「「「「「「うふふふふふふ」」」」」」」
ワキワキと手を動かしながらにじり寄ってくる女子の群れ
「ひぃーーーー！」
どうする。どうするよ俺！
ついに背中に壁が付き。本当に危機的状況の中、俺はハッとする
そして――――
「ふ・・・・・・ふふ、はははは！」
高笑いする俺。どうやら神は俺を見捨てちゃいなかったようだ

バッと壁。『窓ガラス』に向って腕をクロスさせ突っ込む

バリィーン！！

突き破られ、粉微塵に粉砕する窓ガラス

「な、なに～～～！？」

「ここは3階のはず！？」

知ったことか！　揉みくちゃにされるよかマシだ！

それに・・・・・・

「伊達に軍人やってねーーーーー！！」

身体を捻り、さらに姿勢を丸める

ドサ　ゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロゴロ

なんとか着地に成功する

「俺の勝ちだ！」

ふはははははは！と高笑いしながら、俺は闇の中へと消えていった・・・・・・

「はぁ、はぁ、はぁ。・・・・・・ふう、此処まで来れば安心だな」
乱れる息を整え、壁に寄りかかる

しかし酷い眼にあった。まさか此処まで来て全力疾走で走るのなんて軍以来だ

さて、逃げ切ったのはいいがこれからどうするか・・・・・・
おそらく寮では女子達の警戒レベルはオレンジ。見つかれば即緊急体制だろう

時間はまだ21時・・・・・・まだ時間が残っている。さすがの俺でもあの警戒網を潜り抜けるのは至難の業だ

「あれ？　ヨハン君じゃないですか」

「出た～～～！！　・・・・・・って、山田先生・・・・・・？」
突然声を掛けられ。悲鳴をあげるが、そこに居たのは副担任の山田

先生だった

「な、なんだ先生か・・・・・・焦った～」

安心し胸を撫で下ろす

「どうしたんですか？　そんなに怯えて・・・・・・それに洋服も汚れてるじゃないですか」

「あ、いや。これには色々と深い理由がありまして・・・・・・」

理由を説明しようとしたその時・・・・・・

「見つけた〜〜〜！！」

！

どうやら俺は相手を少々見くびっていたのかもしれない
現れた女子の叫びに集まりだす生徒達

「ちぃ！」

「へ！？　な、なんですかこの状況！？」
身構える俺と戸惑う山田先生

「さぁ、天月くん。諦めてこちらの手に移りなさい」
不適な笑みをした生徒達が「さあ」と手を伸ばす

ふ、どうやら俺の命運をもここまでのようだ・・・・・・短い人生だった

走馬灯のようなものが一瞬流れ。ここまでかと諦めかけたその時・・・・・

「や、やめてください！」
夜空の元に天使の一喝が響き渡る

「せ、先生！？」
そう、山田先生。山田先生が俺を庇うように両手を広げ女子達と俺の間に割って入っていたのだ。その小さな身体は微かに震えている

「り、理由は分かりませんが。一人を大勢で追い回すなんて酷いです！」
勇気を振り絞った声はやや狼狽している
「ダメだよ真耶ちゃん。邪魔しちゃ」
どす黒い笑みを見せる女子一同。こ、恐ぇえええええ！！
「先生ダメです！　今の彼女たちは空腹に植えたライオン・・・・・・危険です！」
俺は山田先生を下がらせようとするが・・・・・・
「ダメです！　私は・・・・・私は先生なんですから。生徒を護るのが私の義務なんです！」
断固として動こうとしない山田先生。一体、この小さな身体のどこにそんな勇気があるのだろう
俺は思わず歯軋りをする
「そう、なら残念だけど・・・・・・」
ス・・・・・と手を翳すリーダー格の生徒
（※シリアス場面ではありません）
「かかれ～～～～！」
号令と共に無数の女子が突っ込んでくる

「っ！」

恐怖で眼を瞑る山田先生

・・・・・・！

三人称ｓｉｄｅ

「さぁせるかぁアアアアア！！！」

ヨハンが叫ぶと同時に駆け出し。激しい爆風と同時に砂塵が舞い上がり、その中から深緑の閃光が駆け抜ける

そして砂塵が収まると、そこにヨハンと真耶の姿はなかった・・・・・

真耶ｓｉｄｅ

「かかれ～～～～！」

生徒の号令と同時に駆け出す生徒達

恐い！　でも逃げるわけにはいかない・・・・・・私が逃げたらヨハン君が・・・・・・

「っ！」
眼を瞑り。衝撃に備えようとした時・・・・・・・

「さぁせるかぁアアアアアア！！！」

その叫び声と同時に爆風が巻き上がる
一体何が・・・・・・

そう思った私を、フワリと浮遊感が襲う
そして閉じていた眼を開くと・・・・・・

「なにやってんだアンタは！」

全身を深緑の装甲に全身を包み込み、斜め前に突き出したブレード
アンテナが禍々しさを漂わせ。私を抱えた状態の見たこともないＩ
Ｓからヨハン君の怒号が響いた

ヨハンside

「なにやってんだアンタは！」
俺はＩＳ『アヴァランチ・グリューネ』に身を包んだ状態で山田先生を怒鳴りつける

アヴァランチ・グリューネ
俺の専用ＩＳにして第３世代機最強の機体。スマートなフォルムは他のＩＳよりも小型で、全身を包む装甲は深緑をしている
しかし本来。この機体は祖国ドイツでメンテナンス中だったのだが・・・・・どうやら俺の感情に比例して呼び寄せてしまったらしい

だが今はそんなことどうでもいい

「怪我をしたらどうするんだ！」

「で、でも・・・・・私、私・・・・・・」
じわじわと山田先生の眼に涙が溜まる

「身体を挺して他人を護ろうとする心意気はよし。でもそのせいだあなたが怪我をしたら俺は自分を許せなくなる。俺は・・・・・・あんな思いはもうしたくないんです・・・・・」

「ご、ごめんなさい・・・・・・」
ションボリと俯く山田先生

俺はゆっくりと降下し着地すると、山田先生を地面へ下ろす

「でも・・・・・・ありがとうございました」

パァとＩＳを解除する

「あの時の先生。とても格好良かったです」
満面の笑みを浮かべる
「よ、ヨハン君・・・・・／／／／」
褒められて恥ずかしいのか。弱冠顔を紅くする山田先生
その日の空は。清清しいほどの星空が広がっていたのはいい思い出だ

その5分後。俺は駆けつけた千冬さんに怒鳴り散らされ、俺の機体は再び祖国へと送られたのは翌日のこと

ちなみに、俺が説教された部屋には数十名の先客が居たのは言うまでもなかった・・・・・

第４『女は恐ろしい　俺は思い知ったよ』（後書き）

なんだか山田先生がメインになってる気が・・・・・・作者的にはアリなんだが。読者の皆様はどうなんでしょう？　感想を書いてくれるとうれしいです＾＾

オリキャラ（女複数）を出そうか検討中・・・・・・

では次回を乞うご期待していてください＾＾

第5『女の気持ちが分かる　俺はイヤだ』

チチチチチチチチチチチチ

早朝。セットされていた時計から目覚ましアラームが鳴り響き、俺は眠りから目覚める

「ん、ん――――！　ふぁ～～ぁ」

背筋を伸ばし大きく欠伸をする。時刻は６時３０分・・・・・・朝食まで時間はまだある

モソリと布団から起き上がり、未だ隣で爆睡する幼馴染へと声を掛ける

「おい、もう起きろ」

ユサユサ

「う～～ん・・・・・・あと五分・・・・・・・Ｚｚｚ」

しかし一夏は起きようとせず、モゾモゾと布団に包まる。どうやら相変わらず朝には弱いらしい

「仕方がない・・・・・・」

やれやれと首を振り、溜め息を吐く

「一夏！！」

ガシッ！

寝ぼけている一夏の襟首を掴み、上半身だけを引き起こす

「んあ？」

微かに目を開く一夏・・・・・・だが

「起きるんＤＡ！！」

バシィン！！

一夏の思考解析よりも早く、俺の細くきめ細かい手から放たれた究極の平手打ちが炸裂し、部屋の中に凄まじい音が鳴り響いた

「いって～～～～～～～！？！！」

その日。朝の学生寮全体にとある生徒の悲鳴が木霊したとさ

「そう怒るなよ〜。俺は朝が弱点な幼馴染を起こしただけなんだぞ〜」

「だからってフルスイングの平手打ちはあんまりだろ！？」
頬に真っ赤な手形を残したところを摩りながら怒鳴る一夏

文句を言う一夏をスルーしながら学食に向っていると、曲がり角の所で箒と鉢合わせした

「よ、箒。おはよう」

「おお、箒。おはよう」

「あ、ああ・・・・・・おはよう」
俺、一夏、箒の順に挨拶を交わす。箒は一夏を直視せず目線を少し下げ、誤魔化すようにポニーテールの後髪を玩ぶ

「今から学食行くんだけど、箒もどうだ？　久し振りの幼馴染の同窓会も踏まえて」
めずらしく箒を誘う一夏

「そ、そうだな。そうしよう！」
一夏に誘われたことが嬉しいのか、箒は瞳を輝かせて歩き出す

「んじゃ、行こうぜ」

「ああ！」

「おう」

学食に到着すると、俺達（主に俺と一夏）は針のムシロと化した。
そういや、針のムシロって『アイアン・メイデイ』のことだっけ？
・・・・・・どうでもいいか
でもたしかにコレは拷問の何者でもない

あたり一面から集まる視線

「こ、こいつァすげー」
思わず呟く俺

「と、とりあえず空いてる席に座るか」
一夏も居心地が悪いのか、一瞬タジろくとそういって空席を探し出した

席は意外と早く見つかり、一番端が箒。その隣を一夏。その隣が俺という順番

それぞれのトレイをテーブルに置き、席に座る

ちなみにメニューは幼馴染二人は鮭の塩焼き定職。鮭から立ち込め

る湯気から匂う香ばしい香りが食欲をそそる一品。・・・・・・ふむ、この匂いは柚子と鰹節のタレに少し漬けたのか？

それに変わって俺はというと・・・・・・

「朝からなんてガッツリした物を・・・・・・」

俺が頬張るハンバーガーと、トレイに積み上げられた４つのハンバーガーを眺める一夏と箒

「ん？　そうか？　ドイツじゃほとんどハンバーガーが主食のようなものだぞ？」

そういいながらもう一口頬張る。うん、やはりテリヤキバーガーは絶品だな

「そんな食生活で大丈夫なのか？」

「まあ、軍にいた時はほとんど自炊だけどな～。しかも、部隊の中にまともに料理できる隊員がいなくて大変だったな」

そうだ。初めて『シュバルツェア・ハーゼ』隊の食事を見たときは愕然としたものだ。うら若き乙女がほぼ三食をハンバーガーやホットドックといったファーストフードで済ませてて、不健康極まりない食事を続けていたのを良く覚えている

その後、見かねた千冬さんが給食当番を俺に押し付けていった

まぁ、そのおかげで隊の皆やラウラとも仲良くなれた切っ掛けだったのでよしとした

しかし何故か俺の料理の噂を聞きつけた他の隊員（主に女性）が詰め掛けてきたのはびっくりしたな・・・・・・。そしていつもハーゼ隊の皆が不機嫌だったけど・・・・・・

すると、どこらともなく話し声が聴こえる

「ねえねえ、あの二人が噂の男子だって～」

「なんでも千冬お姉様の弟と元教え子らしいわよ」

「えー。身内揃ってＩＳ操縦者かぁ。やっぱりあの二人も強いのかな？」

昨日同様のこの空気。周りでは女子が一定の距離を保ちつつも『興味はあるがっつかない』そういった気配が感じられる

はぁ・・・・・この感じ、何とか成らないモンかね～

「あ、天月くん、隣いいかなっ？」

すると、俺の隣に数人の生徒が現れた

ええと？　たしか谷本さんと宮沢さん、そしてのほほんさんこと布仏さん

「あ、ああ。俺は構わないけど・・・・・二人ともいいか？」

俺は二人へ尋ねる

「ああ。っていうか俺らもう食い終わるんだけど」

はやっ！？　俺なんて最初のヤツの半分しか食ってないぞ！？

するといち早く食事を終えた箒が立ち上がり、一夏に「話がある」と言われ、一夏もまた続くように席から立ち上がった

なんて薄情な奴らだ・・・・・少しは待てよ。・・・・・まあ

言わないけど

俺は軽く溜め息を吐く

「そういう訳で、好きに座ってくれ」

俺は苦笑いしながら3人に言うと、谷本さんは安堵の溜め息を漏らし、後ろの二人は「よし♪」と小さくガッツポーズをしている。周りからは妙なざわめきが聞こえてくる

「ああ～っ、私も早く声かけておけばよかった・・・・・・」

「まだ、まだ二日目。大丈夫、まだ焦る段階じゃないわ」

「昨日のうちに部屋に押しかけた子もいるって話だよー」

「なんですって！？」

・・・・・・そういや、そんな事もあったな。たしか一年生で８人。二年生は１７人。三年生が３７人という凶悪な人数が自己紹介のために部屋に押しかけてきたっけ・・・・・・カオスとは正にあの状況を示すんだろうな

しかし三年生の数には驚いた・・・・・・しかも目的は一夏ではなく俺で「好きな人はいるのか」とか「付き合ってる子はいるのか」など・・・・・・中にはいきなり告白してきた生徒もいた。まったく、あまり冗談でもそういった事は控えてほしいものだ

俺ことヨハン・Ｆ・天月は生まれてこの方、彼女なんて出来たことがないのだ

まぁ、軍事関連が忙しいせいでそんな暇はなかったんだけど・・・・

・・

元々俺はハーゼ隊のバックアップなため目立った行動は慎むようにと千冬さんから念押しされていたので周りからは腰巾着扱い・・・・・・よくは知らないけど、俺への批判もいつの間にか解消されてたな・・・・・・。噂だと戦場での俺の行動が移された映像が軍のスクリーンに映されたらしく、その後皆して俺に謝罪の言葉を言ってきたな・・・・・・なんの映像流したのか、誰が録画したのかは分かってないらしい

話は戻るが、どうやら三人はどう席に座るか決めていたらしく、スムーズに座った

「うわ、天月くんって朝すっごい食べるんだ～」

俺のトレイを見た布仏さんが半開きの目を少し開き驚いたように言う

「お、男の子だねっ」

「まぁな、軍にいた頃は何かと体力使うから補給は取れるときに取っとかないとな。っていうか、女子って朝それだけしか食べないのか？」

3人それぞれトレイの上のメニューこそは違うが、飲み物一杯に食パンやバターロールといった朝食らしいっちゃらしいメニュー

「わ、私たちは、ねえ？」

「う、うん。平気かな？」

「お菓子よく食べるし～」

「おいおい・・・・・・」

輝ける時代になんて不健康な・・・・・・

「そういえば、天月くんって篠ノ之さんや織斑くんと仲いいの？」

「お、織斑先生とも親しげだったけど・・・・・・」

「ああ、まぁ幼馴染だしな」

俺や一夏にとっては特に意識することではないが、周囲は大いにどよめいた

「え、それじゃあ――――」

谷本さんが何か言おうとしたが、その言葉は突然手を叩く音によってかき消された

「いつまで食べている！　食事は迅速に効率よく取れ！　遅刻したらグラウンド１０周させるぞ！」

白いジャージに身を包んだ千冬さんの声に全員が慌てて朝食を流し込む

あ、こら。そんな急いで食ったら・・・・・・

「っ！？　～～～～～っ！？！！」

案の定。一気に朝食を掻きこんだせいで谷本さんが喉を詰まらせた

「お、おい。大丈夫か！？」

俺はすぐさま自分のスポーツドリンクを差し出す

ゴク、ゴク、ゴク

「ぷはぁ～・・・・・・あ、ありがとう」

「いや、それより大丈夫か？」
俺は谷本さんの背中を摩りながら宥める
「ったく、一気に食おうとすっからだぞ？」
「う、うん。ありがと・・・・・・／／／／」
「ああ～。癒っち顔紅～い」
顔を紅くした谷本さんをからかう宮沢さんと布仏さん
「そ、そんな事ないよ～／／／／」
こらこら君たち。あまりのんびりしてると・・・・・・

スパン！　スパン！　スパン！　パァン！

遅かったか・・・・・・
というか俺だけ容赦ねえ～
「いつまで喋っている。さっさと終わらせろ」
「「「「「すいません・・・・・・」」」」」
仁王立ちする千冬さんに謝罪する

ＩＳ学園に転入して二日目の授業。相変わらず教科書と睨めっこする一夏

山田先生はところどころ詰まらせながらも、生徒達にＩＳの基礎知識を教えている

「というわけで、ＩＳは宇宙での作業を想定して作られたので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアーで包んでいます。また、生体機能を補助する役割があり、ＩＳは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ――――」

「先生、それって大丈夫なんですか？　なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけど・・・・・・」

クラスメイトの一人が不安げな表情で尋ねた

たしかに、ＩＳとリンク・・・・・・つまり『繋がった』状態のあの感覚は人によっては不安になるのも無理はない。俺だって最初はそうだった

「そんなに難しく考えることはありませんよ。そうですね、例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポーターこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言うことはないわけです。もちろん、自分にあったサイズのものを選ばないと、型崩れしてしまいますが――――」

・・・・・・ふと、俺と目が合う。そこで一回キョトンとした山田先生は、数秒ほど経過するとボッと紅くなった

「え、えっと、いや、その、あ、天月君と織斑君はしてませんよね。

わ、わからないですね、この例え。あは、あはははは・・・・・・」
誤魔化すように苦笑する山田先生。・・・・・・残念だが俺には理解できる、別にソッチの趣味があるわけじゃないぞ？　ハーゼ隊の皆に無理矢理女物の洋服を着せられた上に、何処で手に入れたか知らんが『装着型胸パット』なる物を付けられ、顔も化粧を施されてしまい。あの姿は正に俺の黒歴史である
自分ですら見惚れるほどだったのは内緒である

たしかあの時、千冬さんですら気付いてくれなかったのはショックだった

マジで泣きかけたが事情を知った千冬さんによってその騒動は幕を下ろした

・・・・・・ちなみに騒動が治まるまでにナンパされか回数は２６回

そういえば、俺がナンパされる度に相手が狙撃（ゴム弾）を受けていたが・・・・・・結局誰だったんだ？

第5『女の気持ちが分かる　俺はイヤだ』（後書き）

まさかのモブキャラにフラグ・・・・・・・う～む

さて、もう少しでセシリア戦です。自分的には具体的な内容は出来ているんだが・・・・・・投稿はまだ先になりそう・・・・・・・

そういえば、友達のT氏に「千冬フラグ立てたら？」と言われました。自分的にはアリなんだが・・・・・・皆さんはどうですか？

第６『たまには息抜き　俺もほしいよ』

キーンコーンカーンコーン
授業終了のチャイムが鳴り響く

「あ。えっと、次の時間では空中におけるＩＳの基本制動をやりますからね」
山田先生はそういうと、書類を纏めて教室を後にした。俺は教科書類を鞄へ戻し、次の授業に備える

「ふぅ・・・・・・」
先生達が出て行くと同時に、クラスの女子たちが一斉に詰め寄ってきた

速っ

「ねえねえ、天月くんさあ！」

「はいはーい、質問しつもーん！」

「今日のお昼ヒマ？　放課後ヒマ？　夜ヒマ？」

「だから一斉に質問すんなって・・・・・・」
見れば一夏の方にも女子が集まっている。そしてそれを見て不機嫌

そうな顔で睨む箒
一夏は困り果てたような顔で視線を俺へと向けてきて。悪いが助ける事は無理だ
やんややんやと質問の嵐が吹き荒れる中、出席簿アタックの音が鳴り響き、視線を向けると頭を抑えて唸る一夏と、覇気を漂わせる千冬さん
「休み時間は終わりだ。散れ」
千冬さんの言葉に、正に蜘蛛の子を散らすようにそれぞれの席へと戻っていった。はて、千冬さんの顔からやや疲労感が感じられるが・・・・・・まったく、相変わらずなのは千冬さんも同じか
「ところで織斑。それに天月、お前たちのＩＳだが準備まで時間がかかる。・・・・・・特に、メンテナンス中に強制起動させたどこぞの愚か者のＩＳはかなり先だ」
ギロリと俺を睨み付ける千冬さん。・・・・・・まさか千冬さんが疲れてる原因って俺なんじゃ・・・・・・
「へ？」
一夏は訳も分からず間の抜けた声を出す。・・・・・・そういや、束さんが一夏用に作ってた機体があるって言ってたな
「予備がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」
「？？？」
「天月には特注の『打鉄』を用意するらしい」
特注？　何故？

打鉄――――純国産の第２世代型ＩＳ。性能が安定しており、使いやすく、量産化された。鎧のような形態をしている

「せ、専用機！？　一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府からの支援が出るってことで・・・・・・」

「天月くんも専用機持ちなのかな」

「そういえば昨日。変わったＩＳが真耶先生抱えてるの見た子がいて、その機体から天月くんの声が聞こえたらしいよ？」

「「「「「「「「「「えええええええぇぇぇぇぇ！！？！」」」」」」」」」」

「喧しい！　とにかく、そういう事だ。いいな」

騒ぐクラスに一喝し溜め息を吐く千冬さん。ううむ・・・・・・そうとう疲れてるなアリャ

「なんで皆そんなに騒ぐんだ？」

未だ理解できない一夏

「天月。教科書６ページを音読しろ」

うわ、人に押し付けやがりましたよこの人

「りょ～かい。えー『現在、幅広く国家や企業に技術提供が行われているＩＳ。しかしＩＳの中心部であるコアを作成する技術は一切解明されておらず、世界各地にあるＩＳ４６７機、そのｓｙべてのコアは篠ノ之博士が製作したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にある。が、

博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業。組織・機関では、それぞれ振り分けられたコアを研究・開発・訓練を行っており、またコアを取引することはアラスカ条約第７項に抵触し、すべての状況下で禁止されている『・・・・・・まあ今回の一夏に関してはデータ収集のために専用機が用意されてるんだ。理解できたか？」
俺は教科書を閉じ、一夏へ問いかける

「な、なんとなく・・・・・・」

「あの、先生。篠ノ之さんって、篠ノ之博士の関係者なんでしょうか・・・・・・？」
ふと、話題の中にあった篠ノ之という苗字に疑問を示した女子がおずおずと質問する。まあ篠ノ之なんて苗字、そうそう無いから普通はバレるだろうな

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

こら、一教師。なに個人情報暴露しとんねん

「えええええーっ！　す、すごい！　このクラス有名人の身内が三人もいる！」

片や世界の常識をひっくり返した人物の妹

片や最強のＩＳ使いの称号『ブリュンヒルデ』の名を持つ人物の弟

片や最強のＩＳ使いの訓えを叩き込まれた弟子的な男

驚くなと言われたほうが無理だろう

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？　やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才なの！？」

授業中だというのに、箒の周りに集まりだす女子

「あの人は関係ない！」

バン、と机を叩き大声を放つ箒。その大声に群がっていた女子もきょとんとした表情になる

端では溜め息を吐く千冬さん。おいこら、あんたが蒔いた種じゃないか

「まあまあ、そう箒に詰め寄るなよ。箒だって困ってるだろ？」

パンパンと手を叩き、注目を引き付ける。有名人の身内――――そのレッテルはある意味周りの見方を変えてしまう・・・・・・たしか束さんから聞いたが、箒が小４の時にＩＳ関係もあって引っ越してしまったらしい・・・・・・。そのためか、箒は何かと束さんに嫌悪感を抱き始めたらしい。・・・・・・無理もないさ、勝手な理由から好きな奴とも離れ離れにされてしまったんだ。誰だって同じような状況だったらそう変わらないだろう

「ありがとうヨハン。・・・・・・大声を出してしまってすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられるようなことはなにもない」

そう言って視線を背ける箒。流石に空気を察したのか、それぞれの席に戻る女子達。俺も戻ろ

「さて、授業をはじめるぞ。山田先生、号令」

「は、はいっ！」
慌てて授業を始める山田先生。千冬さんはやはり疲れた様子で溜め息を吐いている

昼。学食の時間になり、全員が授業の空気から開放される

「まったく・・・・・・まさか専用機を持ちながら準備に時間が掛かるなんて、とんだ災難ですわね」
お決まりのポーズでふふんと笑うオルコット

「まあ、専用機を使ったところで勝負は見えていますが」

「へえ～。どうしてそう思うんだ？」
俺はあからさまに興味ない雰囲気で尋ねる

「当然ですわ。わたくしはイギリスの代表候補生・・・・・・つまり現時点で専用機を所持しているのはわたくしだけ」

「へーへー」

「・・・・・・馬鹿にしていますの？」

「別に。ただスゲーな～と思って。どうスゲーのかは知らんけど」

「それを一般的に馬鹿にしていると言うのでしょう！？」
ババンと机を叩くオルコット。おいこら、シャーペンが落ちただろうが

「・・・・・・こほん。さっき授業でも言っていたでしょう。世界でＩＳは４６７機。つまり、その中でも専用機を持つものは全人類６０億超の中でもエリート中のエリートなのですわ」

「そうか・・・・・・」

「そうですわ」

「俺もエリートにカウントされてるかな・・・・・・」

「そこは重要ではないでしょう！？」

ババン！　おいこら、消しゴムが落ちただろうが

「あなた！　本当に馬鹿にしていませの！？」

「いや、そんなはずは・・・・・・・・・・ない」

「なんですの、今の間は・・・・・・」

「さて、何かな？」

「っ！　あ、あなたは～！！」

顔を真っ赤にしたオルコット

「おっと悪ぃ、俺用事あるから」

俺はオルコットの言葉を遮り、席から立ち上がり教室を後にする。

教室から「ムキ――――――！！」という声が聞こえたが放っておこう

さて、売店は何処だったか？

千冬ｓｉｄｅ
「ふう・・・・・・」
午前の授業を終え、私は書類整理を完了させ一息吐く

まったく・・・・・・今年は忙しくなりそうだ
不出来な弟に束の妹・・・・・・そして止めにヨハン

「はぁ・・・・・・」
小さく溜め息を吐く

「山田先生。私は先に昼食を済ませてくる」

「あ。はい、分かりました～」
そういうと、席を立ち上がり職員室を後にする

毎年毎年。私が食堂へ行くと生徒たちが騒々しくてまともな休息が取れん

「・・・・・今更か」

私はそう呟き、食堂方面の曲がり角を曲がると・・・・・・

そこにあいつが居た

「お、千冬さん発見」
そう言った馬鹿を殴ろうと拳を振り上げるが・・・・・・・

「飯。一緒にどうっスか？」
その何処か女の心を振るわせる笑みで右手に持っていたビニール袋を持ち上げる

まったくこいつは・・・・・・・

「最近、まともな休息取ってなさげだったんで栄養ドリンクも買っときました。要ります？」

無駄なところで気が利く奴だ・・・・・・・

「・・・・・・ああ、貰おう」
軽く苦笑しながらそういう。どうにも私はこいつに弱いらしい・・・・・・

ヨハンｓｉｄｅ
売店で食料を多数買い取り、千冬さんを連れて屋上へと到着する
おお、見事に誰も居ない
「はい。千冬さんの分」
そう言い袋からおにぎりとサンドイッチ（タマゴ）とコーヒー（微糖）を差し出す
「ああ、すまないな」
俺は「いえいえ」と言いながら自分のサンドイッチ（ハム）を頬張る
千冬さんは受け取ったおにぎりを頬張りながら柵に膝をつく
「よっこらしょ」
俺はその少し離れたところに腰を下ろし柵に背を預ける
「・・・・・色々と迷惑を掛けたな。私の我が儘で日本まで」
視線を変えずに千冬さんが申し訳なさそうに呟く
「なに言ってんですか、長い間世話になったんだから、これ位は等価交換ですよ。俺と千冬さんの仲じゃないっスか」
ははははと笑いながらコーヒー牛乳を啜る
春のそよ風が気持ちいい
「そ、そうか／／／／」
弱冠恥ずかしいのか、微かに頬が紅く染まる
うわ、レア場面だ。写メ撮りたいけど多分やったら殺されるので自

重する

「一夏は俺が責任を持ちますよ。元々幼馴染だし、なにより千冬さんの悲しむ顔なんて見たくないし」
ちょっとハズイセリフにやや、やっちまった感を誤魔化すように頬を掻く

「・・・・・・」
なぜか無反応な千冬さん。・・・・・・スルーされるとオジさん悲しいんだけど

「千冬さん？」
いつもの返しがないのに異変を感じ、顔を覗きこもうとすると

「み、見るな！／／／／」
急にビニール封の塊を投げつけてきた。痛って！　眼に入りかけた！

「まったく、１５の餓鬼が変な事をほざくな」
ふんと鼻を鳴らして背を向ける千冬さん。・・・・・・う～む、なにか気に触るようなことを言ったのだろうか

「とにかくだ。あまりそういった言動は慎め。いいな」

「は、はあ・・・・・・」
一体何に対してなのか分からないが、とりあえず返事をする

ふと、食事を終えたのか、踵を返して入り口へ向う千冬さん

「あ、千冬さん！」
去り際に呼び止める

「ん？　っと」
振り向くと同時に袋から出しか栄養剤『リポ〇タンD』を放り渡す
「これからお世話になるお礼です」
そう言って微笑む
「ふん、生意気な。・・・・・・いいだろう、よろしくしてやる。
感謝しろよ？」
千冬さんはニヤリと笑いながら屋上を出て行った
さて、俺もそろそろ戻るか

第6『たまには息抜き　俺もほしいよ』（後書き）

う、ううん・・・・・なんというかやっちまった感がすごい

千冬ファンの方ごめんなさいm（＿＿）m

なんかツンデレな感じの千冬さんフラグいかがだったでしょうか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3783q/

ＩＳ《インフィニット・ストラトス》～アヴァランチ・グリューネ～

2011年2月1日06時12分発行